



た。あの有名な序曲なしでオペラが始まることに一抹の寂寥感を覚えながらドラマに見入るうち、侯爵の死で悲劇的運命の車輪が回りだす。そこに流れる序曲。場面転換のための処置でもあるがかかえて効果的で、巨匠サンティが緻密に練り上げた音楽は、劇場全体を運命の輪に引き込み感無量だった。

今回は主役2人が役デビューだった。アルヴァーロ役のラ・スコーラは、途中で自宅静養を強いられており、登場した時は声が喉に張り付いたようで、音程も低く先が危ぶまれたが、休憩後の、3幕のアリアでは彼の声色が出始め、力とテクニックでなんとか持ちこたえた。その後どんどん調子上がり、最後の決闘の場面では本領発揮、やっと満足させてくれた感じであった。

ドン・カルロ役のヌッチは、いつものことながら安定した歌唱で、2つ目のアリアでは聴衆の喝采を浴びた。ヴェルディの書いたオリジナルの調で高音を完璧に出す、現代では希有なバリトンである。

プレツィオジッラのカルツァは、前回の《運命の力》プロダクションでも同役を歌っており、低音に穴がたくさんあるが、この音域の広い難役を安心して聴かせてくれた。ガアルディアーノ神父のサルミーネンはたっぷりとしたバスの響きと柔らかいピアノシモ両方を駆使し、GPの後初日を降りて静養しているショッソンの代役で急遽舞台に立った、メリトーネ役のルメツも、ショッソン以上の出来映えを見せた。

演出陣では、舞台美術のフリジエーリオが素晴らしかった。演出陣に恒例のブーイングも1、2人で力なく消えていった。時代背景を原作の18~19世紀に100年ほどずらしていたので、戦闘場面がフランス革命のようで、違和感を与えた部分はあった。

カルロの復讐達成、レオノーラの死、アルヴァーロの救いの成就、すべてが終わった後に、修道院の壁画であるキリスト像がだんだんライトアップされ、魂の昇天が目に見えかような輝かしく優しいオケの音色に包まれて、照明が落ち、劇場中が充実した沈黙を享受した後、拍手が鳴り響いた。 (中 東生)

**オペラ** チューリヒ歌劇場  
《運命の力》プレミエ

和音が数個響くともう幕が開き、プロローグとしての第1幕が始まっ